

平成29年度第4回総合教育会議

- 1 日 時 平成30年2月1日（木曜日）
午後3時00分～午後4時10分
- 2 場 所 富士見市役所 1階 第2委員会室
- 3 出席者 市長 星野 光弘
教育長 山口 武士
委員 五十嵐 洋太
委員 小野寺 巧
委員 簗輪 菊雄
- 4 署名委員 教育長 山口 武士
委員 五十嵐 洋太
- 5 説明職員 教育部長 木村 久志
教育部長 北田 裕一
教育委員会副部長兼教育政策課長 林 みどり
学校教育課長兼指導主事 辻口 幸恵
- 6 事務局職員 総務部長 大熊 経夫
秘書広報課長 森園 幸則
秘書広報課主任 柳 茉利
- 7 傍聴者 0人
- 8 議 事
(1) いのちの教育に関する取組みについて

○星野市長

皆さんこんにちは。また今日は、雪で天候の悪い中、お集まりいただきました教育委員の皆様には、御礼を申し上げます。ありがとうございます。また、日頃から本市の教育行政進展の為にご尽力賜わっておりますことを、この場をお借りして御礼申し上げたいと思います。

そして冒頭、故大久保委員の黙祷から始めさせていただきました。昨年11月に市長室でお目にかかる機会があり、1時間近くお話させていただきました。その席では、ご自分のお身体の状況を率直に語られ、またこれまで教育委員として成してきたこと、本当は星野市長と共にまだまだ教育委員としての仕事をやりたいけれども、星野市長お願いしますねと、障がい者の皆さんへの教育、スポーツ、こうしたことに情熱をお持ちになられておりました。私自身も真摯にその時間を共有し、受け止めさせていただいて、もちろん市長として、大久保委員から受け継いだ話につきましては、しっかりやりますということをお話させていただきました。本当に広い視野で様々なご意見をいただき、特に私にとりましては、教育大綱を策定するにあたり、お身体の無理を押して総合教育会議に出席いただき、議論をさせていただいたことは、財産でございました。これは、本席にいらっしゃる皆様は私以上に、長きにわたり、大久保先生と教育行政についてのご努力をされたお仲間です。申し上げるまでもございませんが、ただいまの黙祷をするにあたりまして、話をさせていただいた次第でございます。私も、大久保委員としっかりと約束をいたしましたので、頑張ってまいりたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

そして、今日は平成29年度第4回総合教育会議ということで、いよいよ平成30年度に向けまして、教育大綱をしっかりと本市の教育の柱として位置付けをいただきます。そしてご案内のとおり、「いのちの教育」ということで、市としてより一層力を入れてまいりたいと考えておりますし、また教育委員会の皆様にもいろいろと考えをしっかりと形にさせていただいているところでございます。このことにつきまして、今日はご議論をいただき、考えを共有させていただき、そしてさらに平成30年度、本市の教育がさらに進展しますよう、良き議論をさせていただきたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

結びにあたりまして、今後もより一層、教育委員会と私ども市長部局が力を合わせ、問題意識を共有させていただき、富士見市の教育施策を進めていくための有意義な会議となりますよう、そしてまだまだ寒い日が続きますので、お身体には十分ご留意いただきまして、今後ご協力をよろしくお願い申し上げます。

○森園秘書広報課長

ありがとうございました。

また本日、説明員として木村教育部長、北田教育部長、林教育委員会副部長、辻口学校教育課長が出席しております。よろしく願いいたします。

それでは、以後の進行につきましては、星野市長お願いいたします。

○星野市長

それでは会議に移らせていただきますが、その前に、本日の会議録署名委員を指名いたします。会議録署名委員には、小野寺委員と箕輪委員を指名いたしますので、よろしく願いいたします。

さて本日は、「いのちの教育に関する取組みについて」ということで議論をさせていただきますと思います。

教育大綱の基本理念に掲げている「いのちの尊さ」について、市民一人ひとりが考える機会を持てるよう、市としましても、より力を入れて取り組んでいきたいと考えております。それでは議論を進めていくにあたりまして、まずは、現在、小中学校を中心として行っている「いのちの授業」について、説明員から説明をお願いしたいと思います。

○辻口学校教育課長

学習指導要領では、児童生徒の人間としての調和のとれた育成を目指して、地域や学校の実態及び児童生徒の心身の発達の段階や特性を十分考慮して、適切な教育課程を編成するものとし、学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童生徒に生きる力をはぐくむことをめざし、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開することとなっています。

市内の各学校におきましては、学習指導要領の趣旨に基づき、道徳や総合的な学習の時間、学級活動や体育、家庭科の授業等で、いのちの大切さに関わる授業を行っています。

お手元の資料1をご覧くださいと思います。各教科で通常実施しているものは除いて、今年度、講師等を依頼して実施したもの、あるいはこの後実施予定のものを一覧として載せています。また今年度実施した学校のうち、助産師さんによる「いのちの授業」の講演を実施した、関沢小学校の学級通信、東中学校のほげんだよりをお手元にお配りしています。そちらに、実施の内容、状況が詳しく紹介されていますので、内容の一部をご紹介しますと思います。

まずは関沢小学校の6年2組の学級通信ですが、10月24日火曜日に、4、

5、6年生を対象に、四国こどもとおとなの医療センター産科病棟副看護師長の中理恵さんを講師にお迎えして、学校保健委員会との共催で、いのちの授業を実施いたしました。学級通信の中にもあるように、子どもたちは、受精卵の大きさを画用紙の穴から感じ取ったり、その受精卵が10カ月をかけて成長していく様子を、模型や実際の妊婦さんと比較しながら、命の成り立ちを学習しました。教科書だけでは学べない貴重な学びであり、自分の命がどこから来て、どのようにつながっているのかを実感できた授業となったと記載されています。

裏にも、子どもたちや保護者の感想が寄せられています。子どもたちからは、「本当に自分がここにいるのは、今までの祖先の人たちがいて、今があることが希望なんだなと思った」「改めて命の大切さがよくわかった」「命のことを改めて大事にしなきゃダメだなと思った」という感想が書かれています。

また、保護者の皆さんからは、「自分が今、ここに生きている事が、とてもすごい事だということに、気付く機会が持てて良かった」「命は宝物だね」「最初に心臓の音を聞いた時やエコー写真を見た時の感覚は、言葉では表しづらかった」「命がうまれる時、キラキラ光るなんて初めて知りました。たくさんの命があるおかげで、自分の命もあるということを忘れずに、大事にしてください」といったようなメッセージがありました。子どもたちも保護者の方々も、命の大切さを実感する授業となったということが、この通信からもよくわかります。

つづいて、東中学校のほけんだよりをご覧ください。12月7日木曜日に、3年生を対象に、同じく四国こどもとおとなの医療センター産科病棟副看護師長の中理恵さんを講師にお迎えして、講演を行いました。東中学校でいのちの授業をお願いして6年目ということになりますが、ここでは富士見市在住の妊婦さん、赤ちゃんを連れてお母さんにも来校していただきました。関沢小学校と同じ講師の方なのですが、子どもたちの成長、実態に合わせて内容を変えていただいているということでした。中学生では、特に性に関する内容も含まれており、生徒たちのこれからの成長に役立つ内容となっています。

生徒の感想がいくつか載せられています。男の子からは、「僕を産んでくれた、大切な命を育ててくれた家族にお礼が言いたくなりました」「僕たちが生まれるまでに、多くの覚悟や決断をして母さんが命がけで頑張っていることを知り、自分の存在や母さんに対する考え方が変わりました」「生きることは、たくさんの人の思いを背負うことなのだと思います」「女性は男性とは違う大変さや辛さがあることを知れたので、これからは女性の体や気持ちを考えて生きていこ

うと思います」「一人ひとりが大切な存在であり、今ここに生きていられることに感謝したい」「たくさんの人たちがつないでくれた命。自分が生まれてこれたのは当たり前ではない」「何があっても大切な新しい命、世界に1つしかない命を失うことがないように」といったような感想がありました。

女の子たちからは、「今自分自身がここにいることを親に感謝しようと改めて思いました」「命よりも大切なものはないと改めて思った」「自分と人を比べて、人より劣っているのかなって考えることもあったけど、自分は自分だから、今のままの自分を大切に生きていきたい」「自分じゃない“命”について考えることは、とても大変で、大切なことなんだと思いました」「これから先、どんなに辛いことや苦しいことが待っているかわからないけれど、自分の命を大切に、他人の命も大切にできる人になりたい」といった感想がありました。

昨日も、同様の講演会を実施したという学校の校長先生から、とても良い内容だったので、今後もずっと続けていきたいという要望もお聞きすることができました。平成30年度につきましては、教育大綱の基本理念を踏まえた「いのちを大切にする教育」について、市内全校において、このような助産師さんによるいのちをテーマにした講演等の実施をはじめ、道徳や総合的な学習の時間など学校教育の様々な場面を通して、推進してまいりたいと考えております。子どもたちにとっても保護者にとっても、いのちの授業はこれから生きていく上で、とても重要な内容であると考えております。

○星野市長

ありがとうございました。

つづきまして、他自治体の実践例について、事務局より説明をお願いいたします。

○森園秘書広報課長

それでは、他自治体の実践例についてご紹介いたします。

お手元の資料2をご覧ください。他自治体における「いのちの授業」実践例ということで、川越市、千葉県、神奈川県の例をご紹介したいと思います。

まずは、川越市の事例でございますが、川越市では現在、主に市内の中学校を対象に、NPO法人川越子育てネットワークによる、子育て体験学習「いのちの講座～赤ちゃんが学校にやってくる～」を実施しております。平成22年度に川越市に提案型協働事業として採用されて以降、毎年実施されており、平

成27年度以降につきましては、近隣の市町村からの要望により出張も行って
いるということでございます。

内容としましては、4kgの水の入ったビニール袋をリュックに入れてお腹
の前に掲げる「妊婦体験」や、4ヵ月～3歳までの実際の赤ちゃんに触れ合う
「赤ちゃん交流体験」、専門家による講義などを行っています。

6月に総合教育会議の勉強会で講演をしていただいた松居和先生のお話でも、
少し問題があると思われる生徒も、赤ちゃんに触れ合うことで、自分自身
が心の中の“人間性の良い部分”に気付くことができ、優しい表情を見せると
おっしゃられていたのが印象として残っています。

また、実際に生徒が赤ちゃんを抱っこすることで、命の重さを実感するとと
もに、自分を産み、育ててくれた両親への感謝など、様々なことを考える機会
となり、最終的には、自己肯定感を高め、自己と他者を大切に思う心を養うこ
とに繋がっていくということで、実施しているということでございます。

つづいて、千葉県の例をご紹介します。千葉県では毎年、「いのちを大切にす
るキャンペーン」を行っています。このキャンペーンは元々、平成7年度に「い
じめ撲滅キャンペーン」として始まったものでしたが、現在では、子どもたち
を取り巻く環境の変化の中で、幅広い意味での「いのち」に目を向けたキャン
ペーンとなっています。

公立の小・中・高・特別支援学校が、各々で年間計画を立てて行い、また年
に1回、県教育委員会主催の「いのちを大切にするキャンペーン実践発表会」
で、各校の代表が情報交換や意見交換を行っているということでございます。

実践例といたしましては、資料にもありますとおり、「自分たちでもできる交
流活動～デイサービスとの交流を通して～」ということで、小学校の余裕教室
を改修したデイサービスセンターで小学校児童との交流をしている取組みとな
っています。普段あまり触れ合うことの無くなってきているご高齢の方々との
交流を通し、相手の立場を思いやる心を育成し、人生経験が豊かなおじいちゃ
んおばあちゃんと話すことで、普段の友達の会話では感じることはできないよ
うな、「生きる尊さ」や「命の大切さ」について理解してもらうことが主な目的
となっています。

裏面の「実践内容」を見ていただければと思いますが、日常交流としまして、
業間や昼休みにデイサービスに来ている年配の方々と交流したり、交流企画と
して、ミニ運動会、七夕会、昼食会などを行っています。取組みの評価といた
しましては、一番下の丸の2つ目にありますとおり、「道徳や保健など」の学習
も関連させて、「生命誕生の喜び、死の重さ、命の大切さ」等について、理解を
より深めることができたという評価をしているところでございます。

最後にご紹介いたしますのは、神奈川県事例です。神奈川県では、子ども

たちの社会性や規範意識の低下、不登校やいじめ・暴力行為などの教育課題、自殺や若者の自立をめぐる問題が生じている中で、他者への思いやりや自分を大切にすることを育むため、「いのちの授業」が展開されておりまして、学校ごとに、各教科、道徳の時間、総合的な学習の時間などを使って、実施しているということでございます。

実践例につきましては、資料の一番下の「いのちの対話集会」というところをご覧ください。こちらは、高等学校で行われた事例ですが、精神科医の先生を講師に招き「こころと命の対話集会」を開催しており、不登校、摂食障害、自傷や反社会的行動など、心に問題を抱えた若者が増えている中で、生徒たちが抱える悩みや問題を共有し、考え、理解し合うことを目的としております。思春期を迎えている生徒さんが持つ特有の心の問題について、専門家を交えて共に解決をしていくと言いますか、お互いに理解し合うために対話をする時間となっております。

また、精神科医の先生との事前打ち合わせや当日の司会進行は、生徒で構成された「思いやり委員会」が中心となって行っており、講演後の質疑など、対話を通して、思いやりや自分を大切にすることを育み、理解を深めているといった内容となっております。

以上、3団体の取り組みについて、説明をさせていただきました。

○星野市長

ありがとうございます。

市内の学校で行っているいのちの授業の実施状況についてと、他自治体におけるいのちの授業の実践例について、説明をしていただきました。これらについて、それぞれの委員の皆さんのご意見を踏まえて、ご発言をいただければと思いますが、まず私から先に、発言をさせていただいてもよろしいでしょうか。

昨日の朝日新聞の一面の「折々のことば」というところに、いのちについてこんな一文がありました。「生きているそのあいだ、なるだけ多くの「終わり」に触れておく。そのことが、人間の生を、いっそう引きしめ、切実に整える・・・いしいしんじ」というものです。その中から確認をさせていただきたいのですが、今学校で行っているいのちの授業については、生命の誕生、生きるということで、助産師さんをお願いして、子どもたちへの問いかけ、働きかけをするというところから築いていただいています。いわゆる、生きる、命といった最初のところというんでしょうか。先ほど申し上げた「折々のことば」は、生と死がひとつであるといった内容でありまして、死に触れると言います

か、身内の方の死を体験するとか、なかなかそういったものについては、教育、特に小学校低学年では、取り上げることに難しさがあるのかどうか。死を見つめること、死というものに触れるということが、より生きることにフォーカスが当たるのではないかと。今を生きる人間としては、そうしたものを対比の中で、経験するべきなのではないか、といった短い文章でした。

学校教育の現場の中で、死というものは、タブーなのでしょうか。それとも、核家族化の中で、例えばおじいちゃんが亡くなりましたとか、おばあちゃんが危篤なんですという状況は、現代ではなかなかありえないと言いますか、あったとしても、遠くにいるおじいちゃんおばあちゃんだったりするわけで、死というものに触れる機会が少なくなってきた中で、こういったことについては、声高に何かを進めるというのではなくても、ポイントとして、低学年や高学年、中学生によっても段階はあると思いますが、どんなふうに取り扱ったらいいとか、こんなふうに行っている例がありますとか、何かご意見がありましたら発言いただければと思います。

○五十嵐委員

市長がおっしゃるとおり、死から学ぶことは多いと思います。私自身が経験したことですが、小さい頃に祖父が亡くなった時に、両親からは、「お前は葬式には出るな」と言われました。その時はどういう意味なのかはわからなかったのですが、死を見せたくないという両親の気持ちだったのかなと。実際に今、葬式だったり死の場面に触れる機会もありますので、私自身はそこから学ぶこともあるのではないかなと思います。

○山口教育長

市長のご発言から、教育で死を扱うことはタブーかどうかというものがありました。生と死は一体的なものですから、生きることを学ぶことは、死を学ぶことと相まって、効果があると思っています。例えば、戦争の悲惨さには人の死が大きく絡んでいるわけですから、戦争体験者から戦争の悲惨さを学ぶことによって、命を大切にすることの尊さ、重さを、学校現場でも伝えるように、戦争が風化をしないようにということで、授業や、公民館等も役割を果たしながら、取り扱っています。そういった意味では、決してタブーではないと思います。ただ、子どもたちが夢や希望を持ち、明るい未来に向かって成長してい

くということでは、死の扱い方については、配慮をしなければならないと思いますし、恐怖を強く感じるような教育にしないように、あくまでも、いのちの尊さに気付けるような、いのちを大切にすることを十分に考えられるような方向での、死の取扱いというのが大切だと考えています。

○小野寺委員

市長がおっしゃるように、生と死は一体だと思います。生を考えることによって、死ということも考えられるし、死を考えることによって、生をもっと生々しく、生き活きと感ずることができるとかと思えます。

私はずっと中学校に勤めていたのですが、そうは思いつながら、今教育長が言ったように、扱ひ方がとても難しいので、積極的に計画の中に位置付けて、死について意図的に、計画的に、継続的に教育をするということではできませんでした。ただ、仲間が亡くなるとか、仲間のお父さんやお母さんが亡くなるとか、そういうことがあった時には取り上げて、全体の前で話をしたり、担任として学級の前で話をしました。その亡くなった子がどんな生き方をしてきたのか、どんな思いで亡くなったのか、どんな悔しさがあつたのかというようなことを、想像を交えて話をし、道半ばで亡くなった子どものために、みんなはその子の代わりにどう生きていくのか、あるいは亡くなったことは変わらないけれども、その子はまだみんなの心の中にずっと生きていくんだと、その子のことを忘れないでみんなで頑張っていこうね、と言う話は、私も校長としてしたことはありますし、各学級で先生方にさせていただいたり、そういう取り上げ方はしてきました。

○箕輪委員

提起に対する答えとしては、死と生は一体不分離のもので、タブーではないと思います。私の今までの経験からも、どんなにやんちゃな子どもであっても、友達の死に直面した時には、周りの大人が何も教えずとも、その場にふさわしい行動が取れるんだなど。死を見つめることは、どう生きるのかということと同時に考えざるを得ないということなのかなと思ふんですね。それが、人間が生きていく上でのひとつの契機になると思ふんですが、年齢によってどういふことを教えていったら良いのかという点では、いろいろと配慮が必要だと思います。例えば、直接人間の死ではなくても、野生の動物の命の連鎖で、餌に

なって食べられてしまうけれど、獲った側の動物はそれで生きていくと。そう
いった自然の摂理があるんだというところから、生と死の関係を教えていくだ
とか、いくつかの方法はあるんだと思います。私の今までの体験の中では、金
子みすゞの詩で「大漁」というものがあるんですが、「朝焼け小焼けだ 大漁だ
大羽鱈（いわし）の大漁だ。 浜はまつりのようだけど 海のなかでは 何万
の 鱈（いわし）のとむらいするだろう。」ということで、ひとつのものが不分
離の関係である生と死ということで、両側面で捉えられるものもいろいろある
んだなど、衝撃を受けました。それぞれの体験の中で、年齢にふさわしいもの
を抽出しながら、生と死の関係の中で、いのちの大切さというものを教えられ
たらと思います。

○星野市長

ありがとうございました。

また大久保先生のお話をしてしまいましたが、実は山口教育長と、葬儀の前に
大久保先生のお家に伺いました。ご家族が揃っていらしたんですが、とても良
いご家族で、そこに大久保先生がいるがごとく、先生のお話をされていました。
私は、教育委員の大久保春美さんは存じ上げていますが、それでも皆さんに比
べたら何分の一ですが、それでもお茶の間に時間を共有させていただいて、先
生のお話の花が咲いて、私は市長としてバトンを受け取ったような感覚にさせ
られました。また、私からすれば、元気の良い姉のような雰囲気でもありまし
たし、大変恐縮ではありますが、先生の死から、そういった感覚にさせられま
した。ですから、私としては、しっかりとバトンを受け取って、子どもたちの
教育や障がい者のスポーツをやりますよというお約束をしたというように、大
久保先生の死からも感じています。それを予期したわけでも何でもないですが、
大久保先生がお亡くなりになったことが、今日の議論や、我々が作ってきた教
育大綱の中に、結果論ですが、色濃く植えつけていただけたと思います。私が
投げかけさせていただいた中で、生と死、これは一体のものであって、生きる
ということは、自分の死を見つめなければならないことであり、私も60歳で
すから、人間の摂理みたいなものを、子どもたちにも可能な限り伝えたいとい
うことを、提起させていただいた次第です。

もうひとつ、私が投げかけさせていただいたものについて、現場の声という
ことで、北田先生からもご発言いただければと思います。

○北田教育部長

死についてということで、学校で行っている、死がテーマのひとつとされている教材について、少し例を挙げさせていただきます。国語科が多いですが、まず小学校1年生では、「ずっとずっと大好きだよ」という教材がございます。これは子どもと飼い犬の話で、飼っていた犬が死んでしまったけども、その後もずっとずっと大好きだよというようなテーマのものです。3年生では、「ちいちゃんのかげおくり」という戦争を基にした教材があります。また「三年とうげ」というもので、これは三年峠で転んでしまうと、命が短くなってしまうという韓国の昔の話を題材にしているもの。4年生では、「ごんぎつね」という、いたずらっ子のきつねとある男の物語もありまして、ごんぎつねが最後に亡くなってしまうお話です。6年生では、「海のいのち」という立松和平さんの話を扱っていますが、漁師である主人公の父が大きな魚との対決で命を落としてしまい、主人公が仇を取ろうとその大きな魚を獲ろうとするんですが、結局は魚を獲ることをせず、これからもより強く生きていこうとする作品です。このようなことから、死に対しては、学年に応じて扱うことが大切になってくるのかなと思います。死と隣り合わせと言いますか、一体と考える中で、自分の命を大切にすることを、教育の中で扱っていくことが大切なのかなと思っています。

また、東日本大震災のことも踏まえまして、学校では毎年黙祷を捧げていますし、道徳教育の中では生命尊重を扱った題材の教育も行っておりますので、私も生きることと死を共にすることによって、子どもたちは今後より強く生きていくのではないかなと感じています。

○星野市長

ありがとうございます。もうひとつ質問よろしいでしょうか。

皆様のご経験の中からお話しいただければと思うんですが、子どもたちの気持ちや心が弱いんじゃないかなと言われて久しいんだと思います。だから、座間市の事件のようなSNSを使って顔も知らないような人に文章の中で魅かれていって、心を開いて相談までしてしまう。今の、実際の子どもたちは、本当に弱いんでしょうか。

○小野寺委員

個人的な考えでは、一人ひとりの子どもの生命力は、弱まっていないと思い

ます。ただ、持っている力、いのちの力を発揮できていないというか、粘れない。なぜかと言うと、人間関係が希薄化しているからではないかと。昔は周りに友達がいたり、親がいたり、そういう人たちと接する時間がたくさんあって、いろんなことを教わって、鍛えられたり、頼ったり頼られたりという関係の中で、いのちの強さというものが育って行って、強くなっていくのかなと思います。人間関係が希薄化しているから、元々持っているいのちの力が発揮できていないんだと思います。

○辻口学校教育課長

現代の子たちが弱いという感覚は無いです。ただ、小野寺委員もおっしゃったように、人とのつながりは希薄だという感じはします。こんなこと言ったら嫌われちゃうんじゃないかとか、こんなことやるとみんなに何か言われちゃうんじゃないかというところがあって、本来はできる力はあるし、やりたいとは思っているけど、それをうまく表現したり、出したりできないというような状況があるのかなと思います。そういったところで、本音を言ったり、嫌なことを言い合ったりできる関係ができるような学級、学校を作りたいと思っています。

○箕輪委員

子どもたちは、私の子ども時代より進化しているな、成長しているなという場面を結構見ているので、弱くなっているという印象はそんなに無いです。ただ、大人たちの世界で、本音で言い合えないというのはあるなと思っていて、私は割と本音で意見を言うタイプなので、例えば地域活動の中で、沈黙は金だという考え方もまだ結構残っていて、その辺のギャップを感じることはありません。大人がそうだから、なかなか子どもたちも本音でしゃべり合えるという環境は難しくなっているのかなという印象は受けています。

○山口教育長

社会の状況が変わっているのは確かですので、変化に対する対応力は、ある部分では高いのかなと思っています。例えばパソコンや携帯ゲームなんかは、もし私が子どもの時に手にしても、今の3歳や5歳の子が使えるくらいにできたかと言えば、そんなことは無いだろうなど。

弱いと思う場面は、例えば、転んだ時に手が出なくて、顔面から落ちて大怪我をする。それから、手の付き方がわからなくて骨折をする。この辺りは、経験不足から来ていると思います。転ばぬ先の杖を大人が用意しすぎていて、大怪我させないように社会が状況を作っているのです、小さな怪我の経験を積まないから、いざという時に大きな怪我をする。それが、心の部分、人間関係にも同じようなことが言えるのではないかなと思います。経験不足、守りすぎということです。一方では守らなければいけないところもありますが、その辺のバランスが昔とは違うのかなと。昔は、もっともっと子ども自身の力を信じて、大人は接していたような気がします。教育をしていて、そこはとても悩むところです。学校は安全が第一なので、守らなければならない。でも本当はもっと経験させたい。転ぶ経験もさせたい。でも転ばせられない。心の部分でも同じことが言えるのかなと。大人になってからもそうですが、苦しい経験をするとな強くなれるのではないかと思います。苦しい経験が、今の子どもたちは少ないのかもしれない。

○星野市長

ありがとうございます。

いのちの授業について、今後形にしていく段階になった時に、授業としての提供の仕方など、今の小学生、中学生には、どんなものを提供してあげることが良いのでしょうか。平成29年度については、助産師さんをゲストにお招きして、実際にお話をいただいたり、また川越市では、赤ちゃんとお母さんに学校に来ていただいて、触れ合ったり。あとは、本郷中学校でしたでしょうか、お隣がほんごう幼稚園なので、よく行き来していて、幼稚園児と中学生が交流しているだとか。こういうことも良いのではないかというような提案のようなものが何かありましたら、お話をしていただけませんかでしょうか。

○箕輪委員

体験ではないんですが、命の連鎖ということで、クラスの生き物係が飼っているニワトリかウサギだったと思うんですが、それを絞めてみんなで頂くという例を耳にしたことがあります。おそらく賛否両論の意見が出ているとは思いますが。中学生か高校生かはわからないんですが、そういう例があるということは、衝撃的な教材でも、ある意味可能なんだなと思いました。ただ、陥っ

てしまうとまずいなと思うのは、いのちの大切さが大事だということで、先ほど教育長がおっしゃっていたように、全部守ればいいというだけでは、逆に弱さを作ってしまうので、バランスの問題もあるんだと思います。危険と隣り合わせの中で、いのちを自分で守っていくというような観点での大切さというのが、今後ますます強くなっていくのかなと思うので、単純に守ればいいんだよということで包んでしまうとまずいかなというふうに思います。

それからもう1点、中学生に限ってのことなんですが、資料の中で、例えば本郷中学校と東中学校、水谷中学校の講演、取組みの実施の時期が、1月とか12月で、該当学年が3年生なんですよ。3年間の中では、遅いかなという印象を受けました。先ほど、学校教育課長からもお話があったように、性教育の部分で、子どもたちにもっと教えていく必要があるだろうという中では、中学校3年生の学年末では、教育のスパンとしては遅すぎるので、もっと早くやるだとか、あるいは在学中に1回で良いのかという問題もありますし、実施していくのであれば、時期や回数の問題も含めて、従前に意図が伝わるような方策を考えていく必要があるのではないかなと思いました。

○五十嵐委員

死やいのちについては、なかなか学校だけでは教えきれない部分もあると思うので、そういったところで、保護者の立場としては、家庭など、環境の中で学ぶことなのかなと強く思っています。地域力を活かすとか、活かした授業という意味で、もっと地域の力をお借りして、教えていくという形をとってもいいのかなと思います。

○山口教育長

いのちを大切にするという観点から、命が生まれる、死ということには、直接的にはそこに行き当たるんですが、今回の大綱の議論をしていく中で、文章でまとめたように、「いのちを輝かせて精一杯生きる人を育てます」というところに繋がっていくことが大切だと思います。もちろん、いのちの尊さを学ぶために、出産、妊娠、育児の部分から入るんですが、自分も大切にすると、他人も大切にすると、それからいのちを輝かせるということでは、精一杯生きること、苦しい状況であったり、ハンデを負ったりしても、精一杯生きるということに関連してくるだろうし、広く考えると、家族愛、人間愛と

いうところも、いのちから出発しているのかなと思うものですから、切り口としては、学習指導要領の理念にもあるように、子どもの実態や学校の状況に合わせ、創意工夫を活かして、経験もしながら、少し広げて考えていくことも大事かなと思っています。

○小野寺委員

教育長の話と関連するんですが、例えば、特別支援学校は、現在の実施内容として、「いのちの大切さ」「元気に生き続けることの大切さ」「相手を思いやること」「困ったら抱え込まずに助けを求めること」「共生社会で人とかわり合い、支えられながら生きることの大切さ」「支えてもらった時に感謝の気持ちを伝えることの大切さ」、こういうことを、日常的にいろいろな授業の中で、担任が行っていると回答しています。こういったように、広い意味でいのちということを考えて、日常的に指導していくということが、ひとつ考えられると思います。

もうひとつは、集中授業、集中体験というような形で、助産師さんの講演や、赤ちゃんと触れ合うなど、行事的な形で、いのちのことについて考えるということ。それぞれの学校で、今やっていること、これからできることを、先生方からいろんな意見を聞きながら、1年かけて年間計画をきちんと作ってもらい、その年間計画には、当然日頃のいろんな教科、授業も入ってくるし、集中的な行事、体験の時期や回数もあるし、あるいは五十嵐委員がおっしゃった地域との関わり、そういうものも含めて、きちんとした年間計画を学校で作ってもらう。それを見直しながら、毎年続けていってもらいと良いのかなと思います。富士見市は、いのちに関する年間計画を各学校で作成していますよということで、やっていけるのかなと思います。平成30年度は一律に、助産師さんの話を全部の学校で聞くということになっていますが、できれば一律にしないで、その方が学校側もやりやすいと思うので、各学校がやりやすいように、近くに幼稚園や病院があればそこと協力するだろうし、それぞれの学校の実情に応じて、やる気を出してやってもらうと。そのための年間計画を作ってもらうというような取り組みが大事かなと思います。

○星野市長

ありがとうございました。

私の投げかけに対して、いろいろとお考えを伺わせていただきまして、ありがとうございました。教育大綱を踏まえて、平成30年度からはいのちというものに、よりフォーカスを当てて取り組んでいただきたいと思います。

最後に教育長から、第2次教育振興基本計画も踏まえまして、平成30年度のいのちの授業の考え方について、お話をいただけますでしょうか。

○山口教育長

資料1にありますように、今年度初めて中学校6校でいのちの授業を行うことになったのですが、昨年夏に大綱ができて、それを校長会でお示したところ、すぐに学校側が反応をしてくれて、このような形になったわけです。平成30年度については、市も財政的に予算の確保をしながら、より内容の充実を行い、小学校全校、特別支援学校にも広げていき、全18校で行っていく。まずは、取り掛かりはここから始めていき、当然小学校でやる内容、中学校でやる内容については、子どもの発達段階に応じて合ったものを工夫したいただくことになっていますが、市全体で取り組んでいくという点では、大きな一歩を踏み出せるというふうに思います。先ほど申し上げたように、これを大きな一歩としながらも、より内容の充実、いのちを育むことをどういうふうに捉えるかということを含めて、今後より良いものにしていきたいと考えています。

○星野市長

いろいろとご意見、ご発言いただき、ありがとうございました。私も平成30年度には、18の学校で取り組んでいただけるということで期待をしておりますし、また内容や経過、子どもたちの反応を見ていきたいと思っています。継続的に機会を持って、状況について、また意見交換ができればと思います。

また、今年度はこれで最後になりますが、平成30年度以降も、総合教育会議において、テーマを設けさせていただいて、意見交換、議論をさせていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

それでは、長時間にわたり、ありがとうございました。以上を持ちまして、本日の総合教育会議を終了させていただきたいと思います。